

日韓を結ぶ遠隔授業の設計と実践

畑 耕治郎*

Kojiro Hata

k-hata@baika.ac.jp

*梅花女子大学

BAIKA Women's University

市瀬 雅之*

Masayuki Ichinose

ichinose@baika.ac.jp

BUSAN College Of Infomation Tecnology

池田 康彦**

Yasuhiko Ikeda

ikeda@bit.ac.kr

**釜山情報大学

概要:梅花女子大学(以下本学)の日本文化創造学科(以下本学科)は、釜山情報大学(以下協定校)の観光日本語通訳科(以下協定学科)と、相互教育の充実と発展を目指して、2006年4月から遠隔授業を実施している。一方が他方に提供する授業ではなく、両学科の異なる授業を一つに結び、相乗的な教育効果を求めている。両学科の担当教員は、本学が開発した協調学習システム「BLIVE」を利用して、時間割や時間帯の調整、授業計画の立案と実施のすべてを遠隔で行ってきた。授業は、年間を通じて1週間に1時間行い、文化の相互理解と日本語の教員養成や学習を展開している。本報告では、その具体的な取り組みを紹介する。

1 はじめに

本学では、2004年度より「新世紀を生きる女性の新たな学び舎の創造」と題したサイバーキャンパス整備事業に取り組んできた。海外の協定校との遠隔教育も、その一環として2005年度に計画され、システムの準備が進められてきた。そして、2006年度の実施に至っている。

2. 遠隔授業を取り組むにあたって

2.1. システム環境

協定校との遠隔授業をはじめると、両校を結ぶ技術的な手段が求められる。近年、専用のテレビ会議システムを利用した遠隔授業が盛んであるが、専用の機器を使用する場合は両校に互換性のある装置を用意する必要がある。また、機器の設置の仕方によっては教室を移動することが難しく、本学のように一般教室としても利用している部屋に機器を設置した場合、教室の確保が難しくなってしまう。

さらに遠隔授業をスムーズに行うためには、授業時間以外にも、場所を選ばない自由な打ち合わせが不可欠となる。

これらの理由から今回の取り組みでは、専用のテレビ会議システムを使用しないで、本学が開発

した協調学習システム「BLIVE」を活用して行うことにした。

2.2. 協調学習システム「BLIVE」

「BLIVE」は、Adode FlashMediaServer2 を利用した Web アプリケーションで従来から見られる標準的なグループウェアの機能にビデオチャット機能を付加したシステムである。すべてのインターフェースに Flash を採用しているため、Web アプリケーションで見られがちなブラウザの違いによるトラブルなどもなく、協定校でもスムーズに活用することができる。また、専用のテレビ会議システムとは異なり、利用者はインターネットに接続できるパソコンがあれば場所や時間に関係なくシステムを利用することができる。

「BLIVE」は、ワーキンググループというグループ単位で利用する。各グループには掲示板・ファイル共有・おしらせ・ミーティング(ビデオチャット)・スケジュール管理などの機能が用意され、それぞれの情報はグループ内のメンバーのみが閲覧することができる。普段はグループウェアとして情報の伝達や共有・蓄積に活用し、必要に応じてミーティング機能(図1)を使うことを想定している。またミーティングの録画や多言語の読み

書きへの対応、掲示板の内容をログファイルに出力できるなどの工夫も施されている。

今回の取り組みでは、この遠隔授業用に1つのグループを作成し、情報交換ならびに情報蓄積にグループウェアを活用している。両校を結んだ授業はミーティング機能を使って行った。授業時間以外の打ち合わせなどにも同様に活用した。

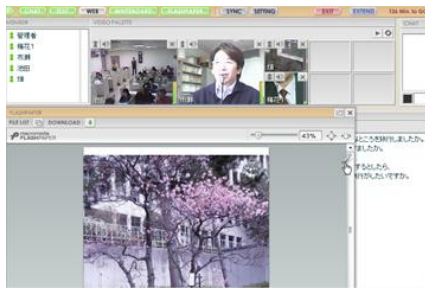


図1 「BLIVE」のミーティング画面

3. 授業の設計と実践

3.1 遠隔授業の準備

国と国を隔てた遠隔授業を実施する上で、担当教員が準備しておかなければならないことがいくつかある。

まず、両学科の時間割と授業時間帯の調整が上げられよう。時間割はセメスター制度の中で、半年単位の調整と確認が求められる。また異なる2つの大学の間において、授業時間帯に差異があるので、1限の中で遠隔授業の実施可能な時間は限られる。その前後の時間の使い方も検討されなければならない。

次いで、実施する授業内容や展開方法の検討が求められる。一方が他方に提供する授業は、負担の偏向性が強いので、長続きはしない。今回は、両学科の異なる授業をひとつに結びつけることで、両授業にとって、相乗的な効果の期待できる内容を検討した。本学科においては、日本・アジア文化分野において、日本語教員の養成を兼ねて、日韓の言語文化の差異を学ぶことを主な目標とする。3年生を対象にする「日本文学・文化を表現するAB」を提供した。協定学科においては、自国に

深めることで、学習意欲の向上が期待された。特に言語学習は、文法的に正しい構成を学ぶことに重点が置かれがちであるが、日常会話には、学んだ内容がそのまま用いられない場合も少なくない。遠隔授業を通じた言語学習が、より現実的な日本語を学ぶ好機となる。2年生対象の「応用日本語」が提供された(1)。

議論・調整・検討の繰り返しが、すべて遠隔のままでも求められたが、「BLIVE」の持つミーティング機能が有効に機能して、円滑に計画を進めることができた。

「BLIVE」に期待された機能は、遠隔で2つの授業を結ぶことに留まらない。学習で得られた成果を蓄積できることにある。蓄積された内容は、授業外においても時間をかけて検討を重ねることができる。遠隔で行う授業時間には限りがあるため、その前後の補完も目指した利用が話し合われた。

3.2 遠隔授業の実践

遠隔授業を実施する上で、上記のほかに、両学科間に存在する開講時期のずれも上げておかなければならない。日本は4月開講であり、韓国は3月開講となる。今回は、授業実施初年度ということもあって、本学科の担当教員が、協定学科の授業に参加することを試みた。教員1人の参加でも、自分たちの教員と違う日本人との会話は、学生たちにとってとても新鮮であったようである。協定学科では16人が履修している。授業後に実施したアンケート(複数回答可)では、受講した全員が

1. 日本人の生きた言語に接することができてよかった。(16人)

と答えた。次いで

2. 新しく、新鮮でよかった。(8人)

3. 本を使った学習に比べて、自然で楽しかった。(7人)

4. 長く何回も授業をして欲しい。(7人)

との回答が続き、遠隔教育の新鮮さが支持を得ている。さらに

5. もっと勉強したいと思った。(4人)

とあり、学習意欲の向上を促している様子も確かめられた。協定学科の授業の動機付けとしては予想した成果を得ることができたといえる。協定学科の3月開講に当たっては、本学科の授業参加がなくても、4月以降の授業準備に時間を費やすことができる。協定学科が作成した教材は、「BLIVE」に掲示することで、4月以降に開講する本学科でも、早い時期から閲覧することが可能になるので、大きな障害にはならない。

本格的な遠隔授業は4月からの開始となった。本学科では7人が履修している（図2）。



図2 授業の様子
（[BLIVE]ミーティング機能より）

授業は時間帯の調整により、1週間に1時間の実施であった。その内容は、協定学科があらかじめ準備していた会話文のプレゼンテーションを行い、本学科の学生たちが、違和を感じる部分をピックアップしてのディスカッションを繰り返した。授業のプレゼンテーションは、「BLIVE」のWhiteBoardや資料提示機能を使用して行われた。授業の中で指摘されたポイントは、CHATやTEXTに記録していった。ただ、学生たちにとって、プレゼンテーションを聞いて違和感のある箇所をピックアップするのは手元の作業になる。発表資料は手もとにも求められた。それは、協定学科においても同様の結果が認められた。内容的には、限られた時間におけるディスカッションのため、内容の検証や整理、発展のさせかたに不十分さを残すものとなった。この解決は、4.「授業後の協調学習」に詳述する。

限られた時間の授業とはいえ、ひとつの話題だけに終始すると展開が単調で緩慢になりやすい。ディスカッションの中で得られた内容を盛り込み、

本学科の学生たちが、協定学科から提供された教材を読み直した。これは検討された内容を確認すると同時に、協定学科にとって、発音やアクセントの学習効果を期待してのことである。さらに、本学科の学生たちが日頃感じている日本文化事情を短い文章で披露するようにした。読み上げを聞いた協定学科の学生たちから質問を受ける中で、韓国の若者文化事情がうかがわれ、お互いの文化事情の差異を学ぶことができた。

遠隔授業の前後に生じた時間的な差異は、作成した教材の読み合わせや確認、授業反省と次回への確認に使用した。

4月に開始した遠隔授業は、協定学科が6月に授業を終えるとともに前期を終了した。協定学科にて再びアンケート（複数回答可）を実施したところ

1. 日本人と直接、顔をみながら会話ができている。(10人)
2. 日本人がよく使う表現、使わない表現などがわかっていい。(5人)
4. 生きた会話に接することができていい。(4人)
5. 日本人の発音が聞けるのでいい。(4人)
6. 日本との文化の違いがわかっていい。(4人)

等の意見が上位を占めた。言語は知識として習得しているだけで、コミュニケーションの場に応じて利用できないと、学習成果として十分とはいえない。自身が置かれた状況を把握しながら、自発的な学習環境が得られたといえよう。アンケートにみえる学生の反応からは、当初に掲げた目標の基本的な部分で一定の成果を収めたといえる。

本学科の授業は参加者が少なかったので、アンケートを実施することはなかったが、開始当初の授業スタイルの新鮮さは好感を持って受け入れられた。遠隔授業終了後の意見では、本学の授業に対する取り組み方がやや受身がちであったとの指摘があった。

この点については、本学科の遠隔授業は、協定学科と授業を結んでいる間以上に、事後の重要性を指摘しておく。異なる言語文化に暮らす外国人

が日本語を学ぶことは、言語を「研究」することより先に、「学習」することが優先される。遠隔授業中は、学習に対するサポートがなければ、授業の成立が難しい。これに対して、日本語を母国語とする学生は、日本語を学習の対象とするより、研究対象にしている。繰り返された授業の中で見出された現象の分析は、遠隔授業の中で深める余裕がないので、遠隔授業終了後に時間をかけて取り組まねばならない。本学科は、遠隔授業の終了後、さらに7月末まで1ヶ月を残す。この期間の授業がこれに当てられた。

4. 授業後の協調学習

本学科では、遠隔授業期間終了後の授業において、提供された各教材とディスカッションにおいて得られた内容の分析を進めた。ディスカッションの分析においては、議事録ならびミーティング録画機能で記録した授業映像を繰り返し閲覧した。相互の言語文化の差異が、日本語の学習にどのような影響を及ぼしているのかを検討することができた。その内容をWebコンテンツ化(図3)して、協定学科の後期授業の復習教材に提供した。後期においても、協定学科との授業期間のずれは、1ヶ月がある。協定学科は、そのずれを活かしながら前期の復習をすることで、本学科の授業との差異を解消する。と同時に、本学科の検討内容に協定学科の議論を加えることで、その内容の充実を目指している。



図3 制作した学習コンテンツ例

遠隔授業を実施することができたのは、4-6月の3ヶ月間の中でも、週1時間のみであった。授業後のアンケート結果にも、その限られた時間と利用方法については、「もっと自由に沢山話してみたい。」或いは「一人一人(1対1)質問して答える時間があればいい。」との指摘を受けている。当然のことながら学生たちからは、もっと時間をかけた議論が求められた。

そこで本授業は、こうした課題を「BLIVE」の掲示板を利用することで解消することを検討している。授業において、さらに議論を深めたい話題を掲示板に掲げ、授業後に両学科の学生たちが自由に「BLIVE」へログインして、議論を深める方法を準備している。

学生たちが、自分たちで問題意識を共有して掲示板に参加することで、議論を深めてゆくことができると考えている。また、「BLIVE」のミーティング機能を利用することで、両学科の共同教材の制作も可能となる。

5. おわりに

「BLIVE」を利用して行ってきた遠隔授業の報告と、授業をサポートする協調学習の準備の経過を述べてきた。この取り組みは長く継続することで、多くの情報を蓄積することができる。蓄積された情報を分析することで、日韓の文化事情の差異や日本の学習の留意点を、さらに明らかにしてゆくことができる。

授業の継続には、システムの安定が欠かせない。アンケートには「設備の準備や調整に時間がかかる。」「カメラの画質を良くして欲しい。」との指摘もあったことも付記しておかねばならない。

(1) 協定校の「応用日本語」クラスは2つある。本学の学生たちと授業を行っていないクラスは、本学が梅花高等学校に提供する高大連携授業のひとつ(担当者は同じ)にて、同様の遠隔授業を実施している。遠隔授業の展開に大きな差異はないが、授業後の指導については大学生と高校生の違いに配慮している部分がある。